
見えない時計

早川 眞治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見えない時計

【Nコード】
N0019B

【作者名】
早川 真治

【あらすじ】
男が買った時計。その時計は、特殊で…

みんなの笑顔 賑やかな街だけど俺は、一人で訳もなく歩いている
向かう先は、ない。みんなの笑顔を横目に俺は、どこに行くのだ
ろう何のために歩いているんだろう。

静かな裏路地で声をかけられた。

「迷っていますね？」

そちらを見ると店を出している人が一人いる。

「これは？」

俺は『見えない時計』と書かれた時計を指さした。

「見えない時計です。値段は、五千円です」
そう云った。

「見えない時計？ 見えてるじゃないか… まあいいや、丁度壊れてる
から買っよ」
そう云いながら五千円を渡して、時計をはめ その場から立ち去っ
た。

ガチャツ—

誰もいない暗い部屋に戻りソファで眠りについた。

（さて、会社に行くか…）

電車に乗る、いつも通りの時間 知ってる人もおらず話す人もいない。

「おはようございます」

会社に着き軽く挨拶をして席に着くいつも通り仕事をして、いつも通りの時間に終わる。

「あれ？お前いたのか？」

上司の一言

「朝から…」

「そうか存在が薄くて気づかんかったよ」

彼には、心ない言葉しかかけられた事がない気がする…もう諦めているが。

帰りにコンビニに寄る。

「あの…並んでるんですけど」

男が割り込んできた。

「あ…すいません、気づきませんでした…申し訳ない」

いつも以上に気づかれない…そんな日もあるのか。

「メシ食って寝るか…」

また朝が来る。毎日同じ事の繰り返し。

「おはようございます」

今日も軽く挨拶をする。

「あれ？俺の席が…あつ部長、俺の席は？」
上司に問う。

「ん？君は、誰だ？」

いつも以上の言葉

「俺ですよ！！」

目の前にいて俺ですと云うのもおかしいが

「誰だ？部署が違うんじゃないか？」

そう云った席に戻っていった。

「俺がわからない？」

俺は、会社を出た。

「見えない時計…人の存在を消していく時計なのか…？」

腕にはめている時計を見て呟く　そして、時計を外し店を探しに行った。

「確か、ここら辺だよな」

「時計はどうでした？」

そちらを見るとやはり店があった。

「見えない棺桶？」

店には、見えない棺桶と云う商品があった。

「五万円です」

俺は、考えた

時計は、存在が消えていく…じゃあ、棺桶は…

俺は、棺桶を買い確かめるために、橋にきた。そして…

ザバーン――

そして、男の死体は、上がる事は、なかった。

『見えない棺桶』これは、男の予想通り使う必要がない棺桶だった…。

（後書き）

この作品は、ボツネタだったのを友人にアドバイスをしてもらって完成させる事が出来ました。最初は、全然違う話だったんですがね（笑）

早川 眞治でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019b/>

見えない時計

2011年1月7日14時59分発行